あの人だけの名前

米内山陽子

登場人物

女　三〇代中盤

女　あの人に初めてもらったものは、名前でした。

小山みどり、っていう、一筆書きで書けちゃいそうなわたしの名前を、あの人が上書きした。

当時、わたしは中学一年生。あの人も中学一年生。

わたしたちのクラスには「こやまじゅんぺい君」と「はまだみどりちゃん」がいて、いてしまってて、

こやまくんはこやまと呼ばれて、みどりちゃんはみどりと呼ばれてしまってて、

「こやま」と「みどり」、どっちも奪われてしまったわたしは、一三歳にして三五人のクラスメイトの中で名前を失って完全遭難状態。

こやまくんもみどりちゃんも目立つタイプで、わたしはスクールカーストでいうところの、下の方、地味なDグループ。

こやまと呼ばれては振り返り、みどりと呼ばれれば振り返ってしまうわたしに、こやまくんもみどりちゃんもイライラしてたんだよね。

「お前じゃねーし。」

「一緒にするな。」

目立つ二人の感情は、少しずつクラスを支配しはじめて、わたしの遭難はますます深刻化しちゃった。

そんなわたしに浮き輪を投げてくれたのが、あの人。

「グリちゃん」

これがわたしに与えられた、新しい名前。
みどり、グリーン、グリン、グリ、グリちゃん。
至ってシンプルなルートで、わたしは名付けられた。
この新しい名前はわたしの浮き輪で、灯台で、ジェットエンジンになった。

だけど、わたしの新しい名前は、クラスにはちっとも馴染まなくて。
こやまくんがいてみどりちゃんのいない時でも、みどりちゃんがいてこやまくんがいない時でも、わたしはコヤマミドリ、とフルネームで呼ばれてしまう。
いつだったか、ふとフルネームで呼ぶことが発明されて、それはものすごい早さでクラスに浸透していった。
わたしをグリちゃん、と呼ぶのはあの人だけ。初めての文化祭を迎える頃、あの人が呼ぶ「グリちゃん」が誰を指すのか、覚えているのはわたしとあの人だけだった。

名づける、という行為について書いてある本に触れたのはこの頃だった。
名付けることは認識することである。
名付けることは束縛である。
名付けることは愛である。

愛。

愛って言う言葉がわたしのこの辺（真ん中）を弾丸みたいに貫いていくのがわかった。貫かれてぽっこり空いた穴に、あの人の顔が浮かんだ。

多分、新しい名前をもらったときから、わたしは恋をしていたんだと思う。

それからはもう、細心の注意を払って、自分の恋心を育てた。

誰にも気付かれないように、誰にも相談せずに、秘めて秘めて、大切にしすぎて、全く誰にも気付かれずに日々は過ぎた。

途中でクラスが離れて、その後同じクラスになって、わたしはあの人と同じ高校に入るためだけに毎日を過ごした。

要領と成績の良くなかったわたしがあの人の成績に追いつくためには、残りの一年を全て勉強に費やすしかなくて、まだ夜も明けきらないうちに起きてひたすら問題集を解いた。あの人を視界の端に捉えられる貴重な学校での時間も、単語帳と参考書をじっと見て、家に帰って学校での勉強をさらって、泥のように眠る一年間。

結果、わたしはあの人の成績を追い越して、県内で一番の進学校にＡ判定が出た。だけどわたしは、あの人と同じ高校を受けた。先生と親にがっかりした顔をさせてしまったけど、わたしの人生の一位はあの人だったから、ちっとも気にならなかった。

そこまでしたけど、告白をする気はなかった。
大好きだったけど、あの人がわたしを好きになることはない、としか思えなかったから。

「グリちゃん、また三年よろしく」
春休みの間に、見違えるほど素敵になったあの人と、高校で再会した。
わたしは「こちらこそ」みたいな意味のことを精一杯言って、また秘める日々を続けていくつもりだった。
高校に入って最初のゴールデンウィークが明けた頃、帰り道の公園にあの人がいた。
一人じゃなかった。
一緒にいたのはあの人と同じクラスの、ダンス部に入っている、小さな女の子。
二人はアイスクリームを食べさせあってた。
「そっち何味？」
「こっちもおいしいよ」
「見て、ベロが緑」
「ほんとだ」
そのまま、二人は唇を重ねた。
もはや、その場から動けなくなったわたしは、二人のキスを、じっと見つめてた。

涙も出なかった。
なんの感情もわき起こらなかった。
あの人は恋人とキスをしていて、わたしはそれを見ている。

それからどうやって家に帰ったかは覚えてない。
気付いたら裁ちばさみを持って、制服のスカートを改造してた。
膝丈の紺のスカートを、膝上一〇センチまで上げた。
ルーズソックスを買った。
シャツのボタンを開けた。
化粧を始めた。
香水を覚えた。
思い切って、ダンス部にも入った。
つまり、わたしは遅めの高校デビューを果たした。

ダンス部には、もちろんあの人の恋人がいる。
背が小さくて、華奢で、底抜けに明るい子。
よせばいいのに話しかけて、よせばいいのに仲良くなって、よせばいいのに自分と比べて、だいたい死

にたくなった。

「グリちゃんあいつと仲いいんだって？」

あの人に話しかけられたのは本当に久しぶり。

「っていうか、グリちゃん変わったよね」

「なんか話しかけやすくなった」

最初に音だけが耳をくすぐって、暫くして言葉の意味を理解した。

褒められているんだ。

ああ、でも、全然嬉しくない……

あの人の恋人の親友の地位にまで上り詰めていたわたしは、あの人にとって優しくするべき対象になっただけ。

カノジョの親友。

「最近あいつが親友が出来たって言うからさ、えー、誰だろって思ったらグリちゃんなんだもん、うけた。」

「うける。うけるね。わたしも自分のピエロっぷり超うける。」

とはもちろん言わずに

「あの子と付き合ってるのってアンタだったんだ、知らなかったー。いい子だよね」
そう言ってその場から逃げるようにトイレへ行った。
トイレの個室にこもって、便座に腰掛けたとたん、初めて涙が出た。
今までに知った事実の点が、あの人によって全て線で繋がって、わたしはこの時初めて、失恋した。

トイレから出たら、洗面台の前を占拠していたコギャルの皆さんがすごく心配してくれた。
「泣いてるし。」「どしたん？」
「今朝、ペットのハムスターが死んじゃって。」
適当な嘘でその場を凌ごうとしたら。
コギャルたちがすごく優しくて、「わかるー」「超悲しいよね」「元気出せー」とかいいながら、わたしの落ちたアイラインを直して、チュッパチャプスをくれた。イチゴミルク味。

それからはもう、あの人を諦めるために必死だった。
あの子とあの人を交えたグループで遊んで、二人のイチャコラするところを近くで目の当たりにしたり、そのグループの中の男の子とデートしたり、ナンパについて行ったり、夜遊びとキスと、セックスを覚えた。
初めてのセックスは、あの人の友達。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

あの人だけの名前（おためしサンプル）

2015年6月30日　初版発行

著　者　　米内山陽子　　Ⓒ 2015年
発行者　　石村寛之
発行所　　有限会社レトロインク
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7
電話　0422-24-9529